

障害理解教育の推進に向けた小学校道徳科教科書における障害の扱われ方 —神戸市で採用されている小学校道徳科教科書と他2社の比較から—



初等教育コース 坂元 陽和

(指導教員 眞城 知己)

問題の所在

中央教育審議会初等中等教育分科会(2012)の報告や小学校学習指導要領解説総則第3章5節の2によると、インクルーシブな社会の構築のために、障害理解を育むことや交流及び共同学習の機会の必要性について述べられている。ことから学校現場において交流及び共同学習が推進されることも、その障害理解教育の必要性が高まっていると言える。また障害理解教育は障害がある子だけでなく、障害がある子に関わる全ての環境や人との関わりの中で、障害を通して人間そのものを理解することで、より子どもたちが一人一人の違いや個性、性格などというものを知ることができると障害理解教育を展開することが重要と考えられる。このことから、「障害」についてのそのもの学習だけでなく、他者理解を通して自己理解を図ることができるような障害理解教育であることが求められると考える。現在、小学校及び中学校で行われている障害理解教育の取り組みの中で、小学校の道徳科教科書に視点を置く。本研究では、小学校で扱われている道徳科教科書の文章、挿絵の両面から、障害に関する内容を扱っている教材をすべて抽出し、障害種、該当する内容項目、障害がどのように表現されているのか、また子どもたちの障害観の形成にとって適正な内容であるかどうかの分析を行う。そして、神戸市が採用している光村図書の教科書と他2社の道徳科教科書の障害の扱われ方の比較と、先行研究での道徳科教科書における障害の扱われ方の比較を行う。それらを踏まえて道徳科において、障害そのものの学習だけでなく、障害の有無に関わらず、他者理解を通して自己理解を図ることのできるような障害理解教育を図るうえで、現在神戸市で採用されている教科書は適正であるかどうかを調査することを目的としている。

方法

対象:

- ・光村図書の小学1年生～小学6年生(6冊)
- ・神戸市立小学校および義務教育学校前期課程で使用されている教科書
- ・東京書籍の小学1年生～小学6年生(6冊)
- ・教育出版小学1年生～小学6年生(6冊)

方法:

収集した道徳の教科書の中で、文章、挿絵の両面から、障害に関する内容を扱っている教材をすべて抽出し、障害種、該当する内容項目、障害がどのように表現されているのか、また子どもたちの障害観の形成にとって適正な内容であるかどうか、表1をもとに分析した。障害種は、「視覚障害」、「聴覚障害」、「知的障害」、「肢体不自由」、「病弱・身体虚弱」、「発達障害」その他の7つに第一筆者が分類した。ただし、高齢者や一時的な病者、けが人と思われる人物が車いすなどを使用している教材は分析から除外した。また、障害を適正に表現しているかどうか、子どもたちに適切な認識を与える内容であるかどうかをそれぞれ第一筆者と他学生2名の計3名それぞれに評定し、一致率が80%以上であるものを採用した。

表1 水野ら(2003)による障害についての説明の評価項目

評価項目	1) 障害名、障害に関する事柄の名称の表示が適切か
① 障害名を明示(書名)	1) 障害名、障害に関する事柄の名称の表示が適切か
② 障害の状態・特性についての説明	1) 障害の状態・特性の説明の有無 2) 障害の状態・特性の説明に具体性があるか 3) 児童が自分の身体との違いを認識できる説明であるか 4) 不適切な説明、ネガティブなイメージをもたせかれない内容が含まれているか
③ 障害者との接し方・マナー配慮についての説明	1) 障害者との接し方・マナー配慮の説明の有無 2) 障害者との接し方・マナー配慮の説明に具体性があるか 3) 児童が実行できる内容が記されているか 4) 不適切な説明、ネガティブなイメージをもたせかれない内容が含まれているか
④ 障害の原因についての説明	1) 障害の原因の説明の有無 2) 障害の原因を児童が理解できるように説明されているか 3) 不適切な説明、ネガティブなイメージをもたせかれない内容が含まれているか
⑤ 障害者のもつ能力についての説明	1) 障害者のもつ能力に関する説明の有無 2) 障害者のもつ能力に関する説明に具体性があるか 3) 児童が理解できる内容が記されているか 4) 不適切な説明、ネガティブなイメージをもたせかれない内容が含まれているか

結果

(1) 学年と出版社

光村図書、教育出版、東京書籍、すべての出版社において第1学年及び第2学年の教科書では障害を扱っている教材がみられなかった。また、どの出版社も第3学年から第6学年にばらつきで障害を扱っている教材がみられており、扱う学年の層は見えなかった。小学校の道徳科教科書(光村図書、教育出版、東京書籍)において障害を扱っている教材数は、16教材であった。教材数を出版社別にみると、光村図書では6教材、教育出版では4教材、東京書籍では6教材であった。

(2) 障害種と内容項目

小学校道徳科の教科書の障害種別の掲載数において、「視覚障害」が4教材、「聴覚障害」が1教材、「知的障害」が0教材、「肢体不自由」が10教材、「病弱・身体虚弱」が1教材、「発達障害」が0教材、「その他」が1教材であった。「その他」には「言語障害」に関する教材が見られた。「肢体不自由」を扱う教材が圧倒的に多く、次に「視覚障害」を扱う教材が多かった。内容項目ごとの障害の扱いにおいては、小学校道徳科の教科書において障害が扱われている16教材のうち、「親切、思いやり」が6教材で最も多く、次いで「希望と勇気、努力と強い意志」が4教材であった。また、「家族愛、家庭生活の充実」が2教材、「よりよい学校生活、集団生活の充実」が2教材、「勤労、公共の精神」が1教材、「生命の尊厳」が1教材が1教材であった。「親切、思いやり」では「視覚障害」が2教材、「肢体不自由」が4教材であった。さらに、「希望と勇気、努力と強い意志」では「視覚障害」が1教材、「肢体不自由」が3教材であった。

表2 障害種と内容項目

内容項目	視覚障害	聴覚障害	知的障害	肢体不自由	病弱・身体虚弱	発達障害	その他	計
・尊厳の尊重 ・自信、自立と責任 ・正義、誠実 ・節度、忍耐 ・関心の持ち方 ・希望と勇気、努力と強い意志 ・真実の探究	1			3				4
・親切、思いやり ・感謝 ・礼儀 ・友情、信頼 ・相互理解、国際親善	2			4				6
・規範の尊重 ・公正、公平、社会正義 ・勤労、公共の精神 ・家族愛、家庭生活の充実 ・よりよい学校生活、集団生活の充実 ・勤労、公共の精神 ・生命の尊厳 ・国際理解、国際親善	1			1				2
・生命の尊厳 ・自然愛護 ・徳義、善の心 ・よりよく生きる喜び				1				1
	4	1		10			1	16

(3) 障害の状態・特性についての説明

小学校の道徳科教科書において障害の状態・特性についての記載内容が記されているのは、16教材中16教材であった。そのうち、「白いつえ」が1教材、「手話」が1教材、「松葉づえ」など障害者が使用している補助具などの記載が多かった。

(4) 障害者に対する接し方・マナー配慮の説明

障害者に対する接し方・マナー配慮の説明が記載されているのは、16教材中10教材であった。そのうち、児童が実行できる内容が記されているのは10教材中8教材であった。8教材のうち、「視覚障害」が3教材、「聴覚障害」が0教材、「知的障害」が0教材、「肢体不自由」が5教材、「病弱・身体虚弱」が0教材、「発達障害」が0教材であった。

障害者に対して支援する場面が描かれている教材が多かった一方で、障害者に対して支援を申し出ることではなく、見守るという支援方法を描いた教材もあった。道徳科の内容項目が「希望と勇気、努力と強い意志」である教材は、障害を乗り越えて障害者スポーツを通して「ハシリ/ビュッパ/パラライアスロンなどで活躍する障害者を描いている教材が多かった。そのため、障害者との接し方・マナー配慮の説明が記載されておらず、障害者に対して支援する場面が描かれていなかった。また、「聴覚障害」や「言語障害」を持つ両親に対する苦悩が描かれており、このような障害者の家族の苦悩や苦労が描かれている場面がある教材もあった。

表3-1 障害者との接し方・マナー配慮の説明(光村図書)

内容項目	視覚障害	聴覚障害	知的障害	肢体不自由	病弱・身体虚弱	発達障害	その他	計
1) 障害者との接し方・マナー配慮の説明の有無	○	○	○	○	○	○	○	8
2) 児童が実行できる内容が記されているか	○	○	○	○	○	○	○	8
3) 不適切な説明、ネガティブなイメージをもたせかれない内容が含まれているか	○	○	○	○	○	○	○	8

表3-2 障害者との接し方・マナー配慮の説明(教育出版)

内容項目	視覚障害	聴覚障害	知的障害	肢体不自由	病弱・身体虚弱	発達障害	その他	計
1) 障害者との接し方・マナー配慮の説明の有無	○	○	○	○	○	○	○	8
2) 児童が実行できる内容が記されているか	○	○	○	○	○	○	○	8
3) 不適切な説明、ネガティブなイメージをもたせかれない内容が含まれているか	○	○	○	○	○	○	○	8

表3-3 障害者との接し方・マナー配慮の説明(東京書籍)

内容項目	視覚障害	聴覚障害	知的障害	肢体不自由	病弱・身体虚弱	発達障害	その他	計
1) 障害者との接し方・マナー配慮の説明の有無	○	○	○	○	○	○	○	8
2) 児童が実行できる内容が記されているか	○	○	○	○	○	○	○	8
3) 不適切な説明、ネガティブなイメージをもたせかれない内容が含まれているか	○	○	○	○	○	○	○	8

(5) 障害の原因についての説明に関する記載内容

障害の原因についての説明が記載されているのは、16教材中9教材であった。そのうち「視覚障害」が1教材、「聴覚障害」が0教材、「知的障害」が0教材、「肢体不自由」が7教材、「病弱・身体虚弱」が1教材、「発達障害」が0教材であった。

障害の原因についての説明において、「視覚障害」を扱う教材では「生まれたときから」といった表現が用いられていた。また「肢体不自由」を扱う教材では病気が原因として描かれているものが多かった。

(6) 障害者の能力に関する記載内容

障害者の能力に関する記載がされているのは、16教材中15教材であった。そのうち、「視覚障害」が4教材、「聴覚障害」が1教材、「知的障害」が0教材、「肢体不自由」が10教材、「病弱・身体虚弱」が0教材、「発達障害」が0教材であった。道徳科の内容項目が「希望と勇気、努力と強い意志」である教材は、偉業を成し遂げた人物を紹介する教材が多く、上記で記したように血のにもむ努力をし、障害を乗り越えて、障害者スポーツを通して「ハシリ/ビュッパ/パラライアスロンなどで活躍する障害者が描かれていた。一方で、困っているところや危険な場面を助けてもらう障害者の姿が描かれているものもあった。

考察

(1) 学年と出版社

第3学年から第6学年の道徳科教科書に障害を扱った教材が偏っていた。障害理解の内容が多様であり、障害者への支援方法の難易度なども多様であるため、児童の学年に応じた障害理解教育を行う必要があり、それに適した道徳科教科書が求められると考える。また、出版社において障害を扱った教材の掲載数にはばらつきが見られた。障害を扱った教材をあまり取り上げていない教科書を選択している自治体で学ぶ児童にとって、他の自治体と道徳科を通した障害理解が行われる機会に差が出てしまうと考えられる。そのため、出版社における障害を扱った教材の掲載数が均等であることが求められる。

(2) 障害種と内容項目

障害種の扱いが最も多かったのは「肢体不自由」で、次いで多かったのは「視覚障害」であった。結果は先行研究との一致が見られる。どの調査においても小学校の道徳科教科書では「肢体不自由」「視覚障害」「病弱・身体虚弱」といった、児童にとって目に見える障害であり、直感的にとらえやすい障害を多く扱っている。障害の特性は障害によって異なり、障害の状態も個々によってさまざまなため、「肢体不自由」や「視覚障害」「病弱・身体虚弱」といったに偏ることなく、さまざまな障害種を扱う教材が掲載されていることが望まれると考える。内容項目においては、「親切、思いやり」が最も多く、次いで「希望と勇気、努力と強い意志」を道徳的価値の内容項目としてねらいとする教材が多くなると考えられる。支援を求めている場面が多すぎると、「障害者」は周囲の人からの援助を常に必要とする人というステレオタイプが児童の中で確立してしまい、それが高学年と障害者は手伝ってあげなければならない」「障害者は自分よりも能力が劣っている」という認識を児童に与えかねないと考えられる。そのため、障害者への支援を扱う教材の占める割合が高くないように教科書を構成していくことが求められると考える。また、「希望と勇気、努力と強い意志」を扱う教材も同様に、これらも一様に「障害者には特別な才能がある」わけではないが、このような頼った認識を児童に与える可能性があるため、血のにもむ努力をし、障害者の抱える困難を乗り越えるといった内容を扱う教材の占める割合が高くないようにすることが求められる。

(3) 障害の状態・特性についての説明

先行研究との一致が見られ、障害の特性や状況について説明する教材が多かった。障害の発達段階において、第2段階(知識化の段階)では障害の特性などの広範囲の知識を得る必要があるため、障害の特性や状況について説明する教材が増えたことは障害理解にとって望ましいと言える。

(4) 障害者に対する接し方・マナー配慮の説明

障害者に対して支援する場面が多く描かれていたが、障害者に対して一概に支援を申し出ることが正しいとするのではなく、また必ずしも支援を申し出ずに行うことが必要であるわけではない。障害者の特性、周囲の状況や障害者自身のニーズを確認するなど多角的で多面的な観点から障害者に対する接し方・マナー配慮について考えることで、他者理解を通して自己理解を図る障害理解教育が実現可能になるとはならないと考える。また、障害者やその家族の苦悩や苦悩を強調した教材を子どもたちに提示しても、障害者への好意的な態度が長期間持続的な効果は望めないと考えており、児童に「障害者やその家族は常に苦悩に耐えなければならない」に生きてしまっていることにつながることを恐れている。そのため障害者の家族の苦悩や苦悩を描いた教材は障害理解教育にとって適正ではないと考え、教材の改善が求められる。

(5) 障害の原因についての説明に関する記載内容

障害の原因についての説明を扱う教材は偏りが見られた。しかしながら、障害の発達段階において、第2段階(知識化の段階)では障害の原因などの広範囲の知識を得る必要があるため、障害の原因について説明する教材が増えることは障害理解にとって望ましいと言える。さらに原因についての説明を扱う教材は、障害者を視点に描かれていたり、その人物についての説明が記載されたりしている。障害の原因についての説明が扱われていない教材の多くは、健康者側からの視点で描かれており、障害の原因についての説明を扱うためには、障害者を視点として描かれている教材で教科書を構成していくことが必要であると考えられる。しかしながら、障害種や障害者によっても障害の原因は個人差があるため、障害の原因が一様にされないよう注意が求められる。

(6) 障害者の能力に関する記載内容

血のにもむ努力をし、障害を乗り越えて偉業を成し遂げた人物がとりあげられていることが多く、偏りが見られた。このように障害者が努力をして困難を乗り越えて偉業を成し遂げるような場面が多すぎると、「障害者は頑張っている人」というステレオタイプが児童の中で確立してしまう恐れがあると考えられる。そのため、小学校の道徳科教科書において血のにもむ努力をし、障害を乗り越えて成し遂げた人物がとりあげられている教材の占める割合が多くないようにすることが求められる。

結論

今回の分析によって、小学校の道徳科教科書における障害に関する内容の扱われ方、以下との問題点が確認できた。
 ・出版社における障害を扱った教材の掲載数に偏りがある。
 ・小学校の道徳科教科書で扱う障害種に偏りがある。
 ・障害者への支援の方法についての内容の偏りがある。
 ・障害者の家族の苦悩や苦悩を描いた教材がある。
 ・障害の原因についての説明を扱っていない教材は健康者を視点に描かれていることが多い。
 ・後述は、上記の問題点を解消するために、小学校の道徳科教科書の中で扱われる障害者像や支援の内容などに偏りがないように教科書の構成を考えていくことが求められる。
 そして現在神戸市で採用されている光村図書は、今回の調査結果と同様に障害種の偏りがあることと障害者への支援の方法についての内容の偏りがあることが問題点として挙げられる。また、障害者の家族の苦悩や苦悩を描いた教材がある。光村図書の道徳科教科書の構成を考えていかなければならない。しかしながら障害者の原因についての説明を扱っている教材については他2社と比較して、扱っている教材数が多かった。そのため他の出版社と同様に改善点はあると考える。

主要文献

- ・野口 真央・齋田 浩信(2018)通常学校における障害理解教育のあり方の検討—一人ひとりの違いに目を向けた障害理解教育プログラムの試作—群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学 第67巻 205-218.
- ・水野 智美・徳田 克己(2011)道徳副読本における障害の扱われ方の適正化。教科書フォーラム 8 44-51.